

# 確かな友情

## 宮尾美明

今年のお正月、愛犬のクロに指先を食いちぎられた。慌てて肉片を探して医者に駆け込もうと、吹き出す指先の血をタオルで押さえ輪ゴムで指の根を抑えきよるきよる探したが、ない。ないはずだった。すでに犬の腹の中におさまっていた。

「殺処分だ」

家族が口を揃えて叫ぶ。そのときは確かに私もそう思った。もう手に負えない、絶望的にそう思った瞬間、

「早く処分した方がいいよ」

子犬の頃から何度となく言われた言葉が浮かんでくる。

「家族ならまだいいけれど、他人を噛んだらどうするの！」  
言われなくても分かっている。そしてその可能性がないというわけではなかった。犬が噛むのはすべて突然なのである。何の思い当たることもなく突然に噛みつく。教え切

れないほどいろいろな場面を思い出して暗い気持ちになる。

「早く処分した方がいいよ」

念願の子犬をやつとの思いで手に入れたのにそんな言葉を投げかけられてびっくり。しかも同じ言葉を違う人から三度も。一体何だつて言うのか？

初めの人はこういった。

「柴には時々こういう子が生まれる。人に危害を加える子」だという。その人の犬は、あまりの恐ろしさに檻から一度も出さなかったという。初めから檻に入れる人はいない。初めはだれでも可愛いはずなのだ。ところが牙を剥きだして強烈な勢いで噛みついたという。それもいつでもどこでもだれに対しても。あまりの恐ろしさに子犬といえども手が出せなかったという。そんなわけで、散歩はおろか可愛がることもなく、飼い主はおびえながら餌と水だけを

与えた。犬は七年で亡くなったという。

子犬が怖い？ そんな馬鹿なことなどあるはずがない。

そう思っていた。

百以上の名前を孫たちと考え、待ちに待ってやってきた子犬は、真つ黒でまるで走る弾丸のようであった。山のようにならぬ名前前のどれも消え即座に、

「クロ」

一瞬で名前が決まった。丸々としたこれ以上なく可愛い子犬。ちぎれるように尻尾を振って走り回るのに、だれの手の中にも入らなかつた。やがて、クロのむき出しの牙は、子犬の持つ尖った牙で、いわゆる甘噛みの時代をすぐに迎えた。

「甘噛みだから、そのうちなおるよ」

そう言われていたが、クロは手当たり次第に咬みに噛んだ。だれに対してもどんなときでも。幼い孫の顔や手足、もちろん私にも、そしてみるみる家族中のだれに対しても、そのまだ幼いのに鋭すぎる牙をむいた。一度くらい抱きかいた、家族のだれもがそう思った。でも、クロを抱く家族はだれもいなかった。クロが人に牙を向けるのは、ちよつとでも体に手が触れたとき、つまりいつでも牙をむいたのだ。

家中のどの部屋にも、もちろん庭にも軟膏が置かれた。

咬まれてすぐに手当をするためである。嘔き出す血に対処するためだった。それでも、犬に触れなければなんとか散

歩は出来た。もちろん首輪をつけるときは何度も何度も狂ったように反抗し噛みつき手に負えなかつたが、首輪をつけなければ何事も始まらない。必死で生傷だらけになつてやつとつけた。

もちろん犬のしつけ教室にも通つた。

「こりゃあだめだ」

大の男のトレーナーの人が「こんなはずはない」何度も繰り返し言い、しつけを繰り返してもやつぱり鋭い歯で噛みつきまくって、結局何も出来ないままだった。

一年経つ頃には正直怖かつた。すっかり大きくなってその分鋭さが消えた牙は、今度こそ本格的に咬むための牙となつて家族のだれもが近づきたくなくなつていた。

一番恐ろしかつたのは、仕事に出かけるときであった。

玄関に立ったままじつとにらみつけていたのだ。何と飛びつく瞬間を狙つていたので。幸い玄関が二つあつたので出入りはもう一つの方でやつていたが、時間が足りず慌てて出ようとすると決まつて飛びついて噛みついた。別に何かがあるというのではなく、わけもなく噛みついた。噛みつく瞬間までじつと様子をうかがっているのが分かるので、怯えるこちらを見透かしているのかと思うような飛びつき方だった。今でも忘れられないのが、出がけに足に噛みついて離れなかつたことだった。大量の出血が止まらなかつた。加減を知らない犬はいつも手加減せず思い切り噛み、

決して放さない。恐ろしかった。足中血だらけに職場に駆け込んで、手当の人を絶叫させたこともあった。家族の犬も犬に近づかなかった。世話する私自身がおびえ始めた。「早く処分した方がいいよ。柴には時々こういう子が生まれる」

囁きが耳元をかすめた。二度目は友人の母親からだった。そして、もう一度は動物病院。待合室で隣の人が気の毒そうに言った。

「早く処分した方がいいよ」と。

そして、私が動物病院に行くと、決まって看護師さんが三人飛んできて押さえつけ口にサックをして治療して貰った。有名だった。

「また、来たか」

と言わんばかりだった。看護師さんはもちろん先生の手も傷だらけになった。

「本当に柴なの？ ハスキーじゃない？」

だれもがそう言うくらい大きくなったころ、

「三歳を過ぎたら少しは落ち着くかも」

期待していた三歳になっても状況は変わらなかった。巨大のクロが

「うわんうわんうわんぐわっ」

恐ろしい勢いで飛びかかって来たときには

「だから、早く処分した方がいいって」

どうしようもなかった。クロ自身すら分からないようだった。ハッと気がついて牙をおさめたときの表情は人間の表情ですらあった。

「人間だって、突然コントロールを失う病気がある。犬だってきつと同じよ」

心理学の勉強をしている娘がぼつりと言う。

そんなときだった。一冊の本に出会った。前に映画を見たが、そのときは何も感じなかったのに、今「犬と私の十の約束」を一つ一つ読んでみるとクロが悪いのではなく飼い主の私が悪かったのではないかと思うことばかりだった。中でも一番涙が止まらなかつたのは、「あなたには仕事もあるし友達もいます。でも、私にはあなたしかいません」

「私は十年くらいしか生きられません。だからできるだけ私と一緒にいてください」

「死ぬときはお願いです。どうかそばにいてください。どうか覚えていてください、私がずっとあなたを愛していたことを」

「私にたくさん話しかけてください。人の言葉は話せないけれど分かっています」

「言うことを聞かないときは理由があります」

クロも今年で十一歳になる。噛みつくのはクロがいつも寂しかったときだったような気がする。仕事に出掛ければ

「もし他人を噛んだらどう責任取るのよ？」

だけれども言われ、自分自身にもそういう思いがちよくちよく頭にちらついた。

四歳を前にしたある日、散歩の途中で首輪の鎖が外れ、金具が私の額を直撃した。気を失って倒れていた私がふと気がつくとき白いものが目に入った。クロの牙だった。

——ああ、ついでにここで咬み殺されるんだ！

そう思ったときだった。今まで噛みつくことしかしなかったクロの口から牙が消え、だからと涎を垂らしながら必死に私を舐めていたのだ。それが軋機だった。噛みつくことがぐんと減り、熱中症で私が倒れていたときなど私起き上がるまで舐めまわしていた。

私が窮地に直面したときクロに何かが起きたことは間違いないことだった。それは私にとっては奇跡のような出来事だった。今も噛みつきは少し残っているが、そんなときもハッとしたように牙をおさめ、噛みつくことがぐんと少なくなつた。

もう安心、そう思っていた矢先だった。私の指先を食いちぎつたのに、申し訳なさそうに私の指先をクロは舐める。あのときからクロは尻尾を立てなくなつた。尻尾を立てず、じつと身動きしない。感情が推し量れないクロの目を私はやつぱり恐いと感じた。でも、わけの分からない怖さではないような気がした。クロはいわゆるスイッチが入つたら

一日帰ってこない。それなのに遊びには出掛ける。都合の良いときだけ相手をする。はつとした。

「サ ビ シ イ」

クロの物言わぬ目が精一杯語りかけてそう言っているように思った。私がどこにいてもじつと見ている。決して目を離さない。わたしの些細な動きにも耳を傾け、目で、足で追いかけてくる。尻尾を振ってまとい付くようなことは一度もしなかった。素直に表現できないいいじけた態度しか取れないクロの精一杯の愛情が、噛むと言うことだったのかも知れない。犬の専門家が聞いたら、何を馬鹿なことを言っているのだ、そう一蹴されるだろうが、そんな気がする。

年ごとに私の中でクロの存在が大きくなる。気がつくとも何でもクロに相談している。何も言わないし、ときには噛む。それでもやつぱりそのときはクロなりのわけがある、そんな気がする。人間と犬との間に確かな友情が結ばれているのは本当だと思う。たかが犬されど犬、ときには人間より大きな力で支えてくれる存在にもなっている。指先を食いちぎられてもなおそう思える。



宮尾美明

みやお みあき

洋画家、高校非常勤講師  
元中学校教員

受賞歴

文芸思潮「イラスト漫画賞」表紙絵部  
門優秀賞

エッセイ賞佳作 他

絵画／現代洋画精鋭選抜展金賞・ド  
ローイングデッサン版画コンクール金  
賞・木曾川風景画優秀賞・他受賞多数

現代美術家協会会員

文学／藤村文学賞佳作・北野生涯教育  
論文2席・シャデイ贈物物語準グラン  
プリ・60歳からの主張入賞他受賞多  
数

## 受賞の言葉

## 宮尾美明

愛犬のためにこんなすばらしい賞をいただいて本当に  
ありがとうございます。大好きなクロのために何かを  
残さなきゃと思って書きました。犬の寿命に合わせて退  
職後念願叶って我が家に来てくれた犬です。私と犬の寿  
命をいっしょにしようと思っていたのですが、こればか  
りはわかりません。でも文の中でクロと私はいつまでも  
若いままだと思っています。本当にありがとうございます。